

大学生の入学から卒業にかけての心理社会的な特徴

—学生生活サイクルとの比較から—

岩 渕 将 士*

加 藤 道 代**

本稿では、大学生の学年差に関する実証的な研究を概観し、各学年の心理社会的な特徴を整理した。学業、大学適応、進路、対人関係の各側面について知見を整理したところ、1年生では新たな対人関係を形成することの困難さや将来を見通せない不安が確認された。また、2年生や3年生では学業意欲の減退や進路の模索とそれに伴う回避的な反応が、4年生では進路決定をしたことによる充実感の高さや対人関係の満足さが心理社会的特徴として確認された。これらの知見は大学生の入学から卒業までの特徴を説明した「学生生活サイクル」(鶴田, 2001)と概ね整合するものであった。最後に、各学年の特徴を元に自己形成支援への示唆について考察し、卒業期の大きなストレスである研究活動を支える要因の探索や、学生の所属学部による卒業期の社会的意味づけに留意した更なる検討が求められると指摘した。

キーワード: 大学生, 学年差, 学生生活サイクル

【問題と目的】

青年期後期に位置付けられる大学生には、成人期への移行に向けてアイデンティティを形成することが求められる(Erikson, 1968)。アイデンティティの形成については、アイデンティティ地位モデル(Marcia, 1966)を元にして、これまで豊富に知見が蓄積されてきた。近年では、よりプロセスを重視したモデルが提案されており、その1つにアイデンティティ形成の3次元モデル(Crocetti, Rubini, & Meeus, 2008)がある。このモデルでは、青年が自身のアイデンティティに対してコミットメントを形成してからも、それを維持もしくは再検討するために情報探索を行い、コミットメントの再構築を繰り返すというプロセスを想定している(畑野・杉村, 2014)。また、溝上(2008)は、アイデンティティ形成を特定の方向性を持った変化である自己発達(self development)と指摘した上で、自己形成(self formation)はより個別性の高い概念であり、個人のあらゆる変化を包含する成長志向的な概念であると捉えた。これらアイデンティティ形成(Crocetti et al., 2008)や自己形成(溝上, 2008)の立場では、青年期の自己を形成する営みを、理想的な自己へと直線的に向かうプロセスではなく、自己を構築し、構築した自己を評価し、評価に基づいて自己を再構築するというサイク

*教育学研究科 博士課程後期

**教育学研究科 教授

ルとして捉える点で共通している。そして、このような青年期における自己形成のプロセスを、学生相談の立場から捉えた概念として「学生生活サイクル」(鶴田, 2001)が挙げられる。

「**学生生活サイクル**」 鶴田(2001)は学生相談の臨床経験から、相談内容が異なっている、一定の時期に来談した学生に共通した心理的特徴があることを見出した。そして、各時期の心理的特徴を整理し、学生生活サイクルとして概念化した。学生生活サイクルは、学生が様々な心理的課題を克服したり、克服しなかったりしながら成長するプロセスを捉える視点(鶴田, 2001)であり、また、学生相談を大学教育の中に位置付ける際に、大学と学生相談が共通認識を持つための視点(高石, 2013)でもある。まず、学生生活サイクルの各時期の特徴を鶴田(2001, 2010)に基づいて概観する。

主に1年生が該当する入学期は、これまでの生活からこれからの新しい生活へと移行する時期である。ここでは、入学以前から持ち越してきた心理社会的な課題と共に、大学入学に伴う心理社会的な課題にも向き合うことになる。大学入学に伴う心理社会的な課題としては、履修や大学での授業スタイルへの適応といった修学上の問題、新しい土地や環境で生活を展開する学生生活上の問題、不本意入学や入学後の目標喪失といった進路の問題、新しい人間関係の形成に関する対人関係上の問題、家族からの自立や親子関係を見直す家族関係の問題等が挙げられる。この時期には大学入学前の生活や対人関係への逃避が生じやすいが、自由な選択ができる環境下で試行錯誤を繰り返すことにより、1年程度をかけて新しい生活に適応していくことが課題となる(鶴田, 2001, 2010)。

入学期に続く中間期は、主に大学2、3年生や留年している学生が該当し、他の時期に比べて学生生活に変化が少ない一方で、生活の様子が個人によって大きく異なる時期である。また、入学期における初期適応が終わり、学生生活を展開する中で自分らしさを探索する時期でもある。例えば、学習意欲の減退、研究室選択や就職といった進路選択の準備、対人関係の深まりと広がりの中で自分の立ち位置を再定義することに伴う葛藤といった、学生生活に慣れてきたからこそその課題に直面する。そして、こうした学生生活の模索の中では、一見すると種々の活動から後退する姿が見えることもあるが、それが後の前進のために必要な充電期間であることも少なくない。前進と後退という両価性や曖昧さを抱えることが、大学生自身にも、大学生を支える周囲の関係者にも求められることが中間期の特徴である(鶴田, 2001, 2010)。

主に4年生が該当する卒業期は、大学生としてのまとめの時期である。卒業期は、大学生としての生活から次の段階の生活へと移行する準備期であり、進路選択の葛藤を始めとする将来の問題、研究の進捗や研究室の身近な対人関係に関する現在の問題、これまでの人生の中で未解決であった課題を整理し、内面的な振り返りを行う過去の問題等が課題となる。また、卒業を目前に控えた時期には入学期とは別の意味で親子関係を見直すこともある。入学期は家族との分離が課題になりやすいが、卒業期には家族関係を内面化し、受容へと向かう際に葛藤が生じやすい(鶴田, 2001, 2010)。

大学生としての時期は入学期から卒業期までであるが、その後の大学院生期についても特徴的な心理的課題が指摘される。例えば、研究に取り組むことに関する不安や集中の困難さ、研究室での対人関係やそれに関連するハラスメントの問題、学生生活を終え、職業人としての自己を形成する

進路の問題等が挙げられる。また、大学院生期は学年によって直面する課題が目まぐるしく変動する時期でもある。修士課程から博士課程に進学するか、それとも就職するかという進路の問題、研究活動と論文執筆を同時並行に進めることに伴う心理的・身体的な負担、学年によって研究室内の立ち位置が変わる対人関係の問題等があり(鶴田, 2001, 2010)、学生生活の様相は個人と環境双方の条件によって大きく様変わりする。

以上の学生生活サイクルを要約すると、入学期はそれまでの生活環境から離れ、大学という新しい生活環境への適応が課題となる喪失と出会いの時期であり、中間期は新しい経験を求める前進と、中だるみやスランプをいった後退を繰り返す模索の時期であり、卒業期は過去・現在・未来の時間軸に渡って自己を振り返り、自己形成に一つの区切りをつけるまとめの時期と捉えられる。ただし、大学院生期は個人だけでなく学年や研究室といった環境要因による変動も大きいこと、また、専攻する学問分野によって大学院進学率が異なり、大学院に進学することの社会的な評価も大きく異なることから、大学院生期を1つの時期として整理するには限界があると考えられる。

本研究の目的 以上で整理した学生生活サイクルには4つの意義が指摘される(鶴田, 2010)。つまり、ある大学生の学生生活上の位置を把握すること、心の健康度が高い者にも低い者にも目を向けやすくなること、未来志向的に学生を捉えられること、そして、学生全体を俯瞰して理解する際の助けになることである。特に最後の視点は、学生相談カウンセラーと、大学で学生に関わる全ての教職員との共通項を提供し、連携・協働を促進する役割を担うものである(齋藤, 2006)。

以上で概観した学生生活サイクルは、鶴田(2001)の豊富な学生相談経験の中で導出された概念モデルであり、事例研究の積み重ねから構築された背景がある。したがって、学生相談や学生支援のような大学生と直接向き合う現場において、学生理解を助ける有意義な概念と言える。その一方で、学生生活サイクルの各時期の特徴を実証的な研究文脈で包括的に検討した研究は見られず、学生生活サイクルが実証的研究から同様に導出される概念であるか疑問が残る。また、学生生活サイクルが提案されたのは2000年頃であるため、その後の研究知見の蓄積の中で、学生生活サイクルという概念を補完する新たな視点が提示された可能性もある。これらの問いに対する示唆を得るため、本研究では大学生の学年差に着目して近年の研究動向を概観する。そして、これまでに蓄積された知見と学生生活サイクルを比較し、大学生の自己形成を支援する上で、今後の検討が求められる課題点を明らかにする。なお、大学院生期は時期としての共通項があることは否定されないが、個人内要因だけでなく、種々の環境要因の影響によって多様性に富むことが想定されるため、本研究では大学生の入学から卒業までに焦点を当て、大学院生期については検討しないこととした。

【方法】

調査時期・方法 2020年6月に Google Scholar を用いて文献検索を行った。学生生活サイクル(鶴田, 2001)は大学生の各時期の特徴を俯瞰的に捉えた視点であるため、まず「“学生生活サイクル”」をキーワードに文献検索を行った。次に、学生生活サイクルについて直接言及していなかったとしても、大学生の複数学年を対象とした調査研究から各学年の特徴を概観できると判断し、「“大学生”

AND “学年差” AND “学生生活”]をキーワードに文献検索を行った。「学生生活」をキーワードに含めた理由は、本研究の目的が特定の心理学的要因の概観ではなく、学生生活という時間的・空間的な広がりの中で大学生の自己形成支援に資する知見を抽出することにあつたためである。なお、いずれのキーワードも刊行年の条件は指定しなかった。

採用基準 文献の採用に際して、①学術論文であること、②心理学領域の文献であること、③仮説検証的な研究であること（展望論文や事例研究論文、仮説生成的な質的研究は除外）、④4年制大学の大学生を対象としていること（短期大学や専門学校等で行われた調査が含まれる文献は除外）、⑤大学生の各学年における心理社会的特徴の差異に言及していること（単一の学年のみを調査対象とした場合には、その学年に特有の研究目的を設定した文献のみ採用）という5つの基準を設定した。

分析方法 上記の採用基準を元に文献検索を行い、入学から卒業までの「時間軸」と、学業や対人関係といった「領域」の2軸から知見を整理した。

【結果】

キーワードを元に文献を検索したところ、「学生生活サイクル」の検索結果は46件であり、学位論文や抄録等の学術論文でない文献（10件）、展望論文や事例研究論文等の仮説検証的ではない文献（25件）、調査対象が4年制大学の大学生のみではない文献（2件）を除外した結果、9件が採用された。次に「大学生」AND “学年差” AND “学生生活”で検索した結果は110件であり、学術論文でない文献（16件）、心理学領域以外の文献（5件）、仮説検証的ではない文献（7件）、調査対象が4年制大学の大学生のみではない文献（20件）、学年や時期への言及をしていない文献（29件）を除外した結果、33件が採用された。ただし、2回の検索で重複した文献が3件あつたため、最終的に採用した文献は39件であつた（Figure1）。

研究デザイン 採用基準として実証的な研究であることを設定したため、展望論文や事例研究論文、仮説生成的な質的研究論文は除外された。採用された文献で用いられた研究デザインは、1時点の調査（横断調査を含む）による量的研究が34件、縦断調査による量的研究が3件、横断調査と縦断調査を同一文献内で報告したものが2件であつた。ただし、縦断調査を行った文献のうち、長期的な縦断的变化を検討した研究は奥田・川上・坂田・佐久田（2010）と坂田・佐久田・奥田・川上（2013）のみであり、松島・尾崎（2013）は3年間の縦断調査であつたがコホートとしての分析に留まっていた。また、溝上（2004）は1年生から2年生における2年間の縦断調査であり、三重野ら（2016）は中間期の夏休み前後の短期縦断調査を行ったが、学年差は横断的な検討のみであつた。その他、1時点の調査による量的研究に分類した徳田（2008）では、3年生を対象に質問紙調査を行い、1年生の頃を振り返って回答を求める回顧法を用いて、疑似的な縦断調査を行っていた（Table1）。以上より、長期に渡る縦断的变化を検討した研究が少ないことが確認された。

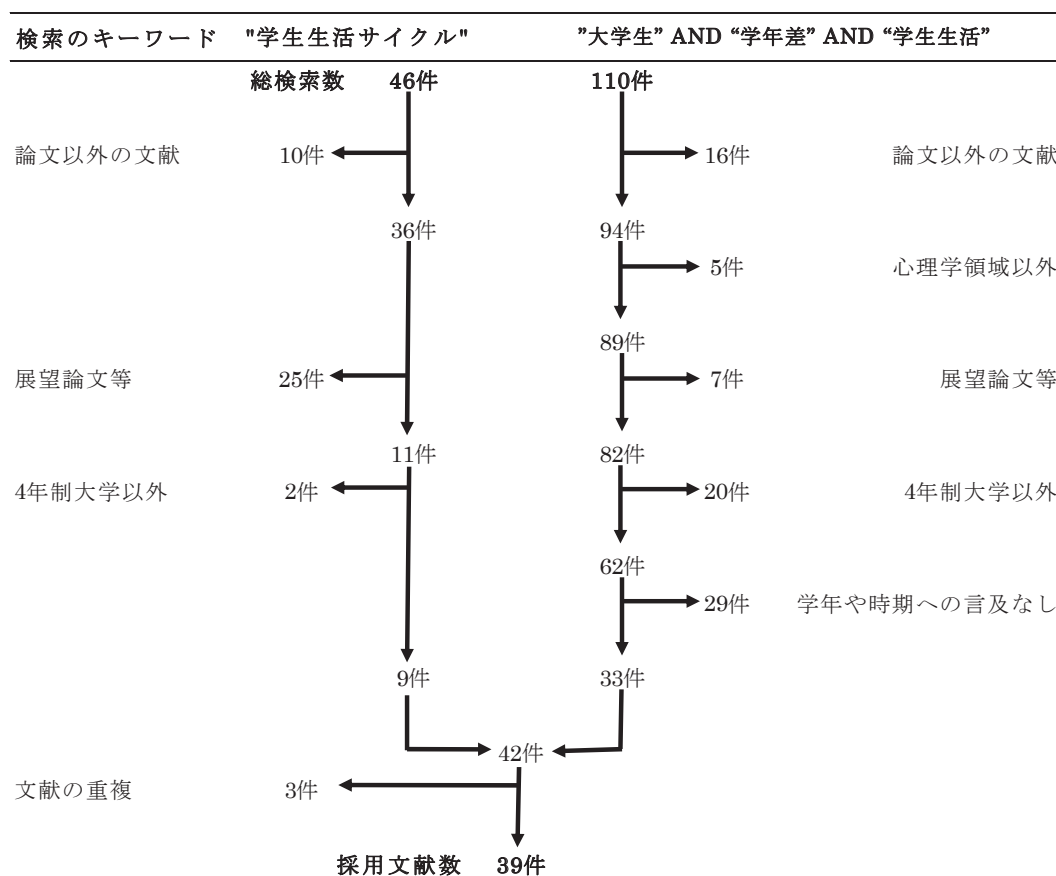


Figure1 文献の検索過程 (2020年6月「Google Scholar」で検索)

Table1 研究デザインによる文献の集計結果

研究デザイン	件数	割合
1時点の調査による量的研究(横断調査を含む)	34件	87%
縦断調査による量的研究	3件	8%
横断調査と縦断調査を併用した量的研究	2件	5%
質的研究	0件	0%
計	39件	100%

入学期の特徴 主に1年生が該当する入学期は、これまでの生活から離れ、新しい生活へと移行する時期である(鶴田, 2001)。それに伴い、大学での新たな生活に適応する難しさや、目標が不明瞭になったり、元々持っていた目標が喪失したりする中で将来展望を持つことが難しいという課題に直面しやすい。また、新しい対人関係を作る難しさや、家族からの自立に伴う葛藤といった課題にも直面しやすいと捉えられてきた。以下では、学業や学生生活への適応に関する特徴、進路に関

する特徴、対人関係に関する特徴の主に3点について入学期の知見を整理する。

まず、学業や大学適応の特徴について整理する。入学直後は授業への意欲が高く（溝上，2004），不本意入学した者も入学して1か月後には大学生活に満足感が得られる（庄司，2011）といった適応的な知見が報告されている。しかし，修学目的が不明瞭な学生も多く（佐久田・奥田・川上・坂田，2003；吉良ら，2007），1年生の後期に向かうにつれて日常生活における不安（藤井，1998）を始めとする精神症状を感じる学生が増え（速水・中込，1983），前期よりも授業への意欲が低減する（溝上，2004）。また，修学への明確な目的意識を持てていない学生が多い（佐久田ら，2003；吉良・田中・福留，2007）。ただし，2年生と比べれば授業意欲が高く（溝上，2004），自尊中心の学習動機が3年生や4年生よりも高い（内野・青木，2005）ことから，入学してからの1年間は学業や学生生活に対して一定のコミットメントを維持できていることが確認された。こうした学業や学生生活での初期適応は，大学による組織的な予防活動によっても支えられていた。石川・児島・青山（2017）では，新入生を対象とした初年次ゼミの効果について検討し，少人数ゼミでの居心地の良さや所属感が高いことが大学の初期適応を促進することが示された。また，新入生に対する各種情報提供や新しい対人関係作りを目的としたオリエンテーションの実施（佐久田ら，2003），学生相談機関によるスクリーニング調査（山口・光井・中村，2019）といった種々の予防的介入が行われており，1年生は他学年に比べて学生相談機関の周知度（伊藤，2006）や有用性の認知（坂本・千島，2018）が高いことが示されている。

次に，進路や目標意識の特徴について整理する。入学期は大学での生活が始まったばかりであるため，その後の学生生活に対して先の見えない不安を感じており（奥田ら，2010），就職という大学卒業後の進路についての見通しもあまり持てていない（佐久田ら，2003；新居田，2019）。また，大学に期待を持って入学し，それを維持できている学生が約35%いる一方で，そもそも期待を持って入学したわけではなく，入学後も学生生活に期待していない学生が約30%いることが報告されている（吉良ら，2007；溝上，2004）。さらに，特に入学直後の時期には，新しい生活の戸惑いやその後の学生生活に対する不安が生じやすいため，進路変更を考える者も少なくない（庄司，2011）。このような戸惑いが生じやすい時期の予防的介入に際して，水野・千島（2018）は入学前に抱いていた学生生活への期待と，実際の学生生活とのギャップに着目して検討した。そして，期待と現実のギャップによって否定的な反応が生じたとしても，肯定的な捉え直しをすることで，大学不適応を予防できる可能性が示唆された。肯定的な捉え直しは学生生活に不適応を感じている学生が自らの適応努力によって達成できる場合もあるが（山口ら，2019），目標を見失い，大学からの退却が強まっている学生に対しては，集団精神療法のようなグループワークが効果的と考えられている（水野・千島，2018）。

次に，対人関係の特徴について整理する。堀井（2012）は対人関係の形成を阻害する要因の1つである対人恐怖心性に着目し，大学1年生から4年生までの横断調査を行った。その結果，入学期が他の時期に比べて最も対人的な不安意識が高いことが明らかとなった。また，藤井（1998）は大学生活不安尺度を作成し，1年生は3，4年生よりも周囲からの評価に関する不安が高いことを明らかにした。

このように、新たな対人関係の形成が迫られる入学期には対人関係に関する不安が生じやすいが、良好な家族関係を持つことで、学業や友人関係、アイデンティティ形成が促進される可能性が示唆されている(宇都宮, 2018)。

中間期の特徴 主に2, 3年生が該当する中間期は、大学という新しい生活への初期適応を終え、学業、進路、対人関係といった諸側面で模索をする時期である。この時期には種々の側面で無気力に陥りやすいが、親密な対人関係の形成や進路を模索する中で自己理解を深める姿も見られる(鶴田, 2001)。以下では、入学期と同様に、学業や大学適応、進路、対人関係の特徴を整理する。

まず、学業や大学適応の特徴について整理する。中間期はレポート課題への取り組み方に慣れ(宮本・柴崎・大平・富田, 2011)、専門的な授業が増えることで学業における満足度が高い(佐久田ら, 2003; 坂田ら, 2013)。その一方で、入学期より授業や大学生活への意欲が低く(溝上, 2004; 高山, 2006)、登校回避感情が高い(堀井, 2019)といった不適応的な特徴が多く確認された。また、専門分野の実習を控えた夏休み前に一時的に精神的健康が悪化することや(三重野ら, 2016)、アルバイトをしている学生がしていない学生よりも精神的健康の状態が悪いことから(三重野ら, 2016)、学業の専門性が高まることで学生はより多忙になり、心理的な負担が強まることも中間期の特徴として確認された。ただし、中間期では中核的アイデンティティと学習意欲との有意な関連が報告されており(松島・尾崎, 2013)、学業に積極的に取り組むことで自己形成が促進される可能性が示唆されている。

次に、進路の特徴について整理する。2年生は1年生よりも将来展望(佐久田ら, 2003)やキャリア意識(新居田, 2019)が高いことから、進路について考えが深まることが確認された。しかし、3年生になると進路選択が目前の課題として自覚されるため、1年生より将来展望は高いが(辻井, 1994)、回避的な反応として職業観(菰田, 2007)やキャリア選択自己効力感(三保, 2018)が一時的に低下する。また、3年生は2年生よりも精神的な自覚症状が多く(速水・中込, 1983)、抑うつが高い(羽吹, 2006)ことから、進路選択が3年生にとって大きな心理的課題であることが確認された。ただし、こうした進路面の一時的な退却は、キャリア教育の授業実践によって支援できる可能性が示唆されている(樽木, 2019)。

次に、対人関係の特徴について整理する。交友満足度は入学期から中間期にかけて大きく変化しないが(坂田ら, 2013; 奥田ら, 2010)、対人恐怖心性は入学期より中間期の方が低いことが報告されている(堀井, 2012)。また、親からの心理的な自立(辻井, 1994)や異性関係への意識の高まり(杉村・北村, 1989)といった知見から、中間期は大学入学前の対人関係から大学入学後の対人関係へと移行する時期と確認された。しかし、サークルやアルバイトでリーダー的役割を担う3年生以上では、社会規定的完全主義傾向や抑うつが高く(羽吹, 2006)、周囲からのプレッシャーとそれに応えようとする努力の葛藤も中間期の特徴と位置付けられた。

卒業期の特徴 主に4年生が該当する卒業期は、大学生としての生活から次の生活へと移行する準備期と位置づけられる。この時期には、将来への準備を進める中で、卒業研究に集中しきれず、進路に関する迷いや不安が生じ、研究室という新たな対人関係の中で生活することの戸惑いが表出

されやすい(鶴田, 2001)。

卒業期の概ね5月頃までは学生生活における不安(中島, 2013)や登校回避行動(堀井, 2019)が1年生や2年生より高いが、6月以降は大学生活の充実感(坂柳, 1997)や生きがい度(橋本ら, 2016)が他学年より高いことが報告された。また、6月以降は2年生や3年生よりもキャリア選択自己効力感が高く(三保, 2018)、職業的不安が低い(坂柳, 1996)、進路決定の前後で学生生活の充実度や進路意識が変わることが確認された。対人関係では、入学期や中間期に比べて対人的な不安意識(堀井, 2012)や対人的ストレス(橋本ら, 2016)が低く、交友満足(坂田ら, 2013)が高いことから、卒業期には友人との深い関わりの中で満足感を持てる学生が多い。ただし、卒業期の学業に該当する研究活動や、研究室内の対人関係の問題、進路選択に伴う家族との葛藤等に関する知見は、本研究において確認することができなかった。

大学生における学年差のまとめ 以上で概観した研究知見を、学業、大学適応、進路、対人関係、予防活動の5側面と、有意差が確認されなかった「自己」に関する側面の計6側面から整理した(Figure2)。整理した知見と学生生活サイクル(鶴田, 2001)で示された入学期、中間期、卒業期の特徴を比較した結果、概ね整合することが確認された。つまり、入学直後は学業への意欲が高いだけでなく、進路や対人関係の不安が高い時期であること、入学期の後半から中間期にかけては授業への意欲が低く、大学での適応感も低いこと、3年生は進路選択の時期であり、心理的な不適応や回避的な反応が生じやすい時期であること、卒業期は進路決定をし、対人関係の充実度や学生生活の満足度が高い時期であることが確認された。ただし、本研究で十分に整理しきれなかった部分として以下の4点が指摘される。つまり、1) 卒業期の学業に当たる研究活動、2) 中間期以降の予防活動に関する実践研究、3) アイデンティティ感覚が指標の1つと位置付けられる自己形成の学年差、4) 中間期から卒業期にかけて生じる進路選択の葛藤が指摘される。

なお、本研究では、アパシー傾向(森津, 2008)、日常生活におけるポジティブな出来事経験(細田・三浦, 2011)、就職不安(山下, 2011)、個人の内面を反映する色彩コラージュの特徴(牧田, 2017)といった各側面で有意な学年差が確認されなかった。したがって、以上で整理した各学年の特徴は、大学や学部、入学年度等の要因によって必ずしも一貫しているわけではないことに留意する必要がある。

【考察】

本研究では主に大学生の学年差を検討した実証的な研究を概観し、各学年の心理社会的な特徴を整理した。その結果、各学年の特徴は学生生活サイクルで提示された特徴と概ね整合することが確認された。以下では、本研究で確認された各学年の特徴を要約し、大学生の自己形成を支援する際の留意点と今後の課題について考察する。

入学期の特徴と自己形成支援 入学期は大学という新しい生活への適応が求められる時期であり、学業(佐久田ら, 2003; 吉良ら, 2007)、大学適応(藤井, 1998; 速水・中込, 1983)、進路(奥田ら, 2010; 庄司, 2011)、対人関係(堀井, 2012; 藤井, 1998)といった諸側面で不安や不適応を感じやすい時期であることが確認された。また、予防活動(山口ら, 2019; 石川ら, 2017)が多様に展開され

	入学期			中間期		卒業期		有差違が示されなかった文献
	前期	後期		2年生	3年生	概ね6月頃まで	概ね6月以降	
学業	P 入学当初は授業への意欲が高い (橋上, 2004)	3・4年生女子より1年生女子の方が自尊中心の学習動機が高い (内野・青木, 2005) 修学目的が不明瞭 (佐久田ら, 2003)	1年生より授業意欲が低下 (橋上, 2004)	1年生より授業意欲が低下 (橋上, 2004)	1年生より授業意欲が低下 (橋上, 2004)	?		
	N 修学目的が不明瞭 (佐久田ら, 2003)	1年生前期より授業意欲が低下 (橋上, 2004)						
学生生活	P 5月には不本意入学者も大学満足感が向上 (庄司, 2011)	2・3年生よりストレスが低い (橋本, 2016)				1・3年生より大学生生活充実感が低い (佐藤, 1997) 1・2年生より学業満足が高い (佐藤, 1997) 2年生より生きがい度が高い (橋本ら, 2016)		ボジティブな出向経験 (ディロー・アグア) (橋田, 三浦, 2011)
	N 3・4年生より日常生活不安が高い (橋井, 1999) 学習意欲不明	2・4年生より精神的な自覚症状が多い (清水・中込, 1983) 1・4年生より生きがい度が低い (橋本ら, 2016) 1年生より学校帰還感が高い (橋井, 2019) 専門教育のスケジュールが過密な夏休み前に精神的健康度が悪化 (三重野ら, 2019)	4年生より大学へのコミットメントが低い (坂田ら, 2013) 1・2年生より帰りの帰りが低い (390, 2005) (橋井, 2019) 1・2年生より学校帰還感が高い (中島, 2013)	1・2年生より学校帰還感が高い (橋井, 2019) 1・2年生より大学不適応が高い (中島, 2013)				アバシー傾向 (藤澤, 2008)
進路	P 親制が甲斐性を感じ (庄司, 2011)	4年生より将来不安が高い (奥田ら, 2005, 新居田, 2019)	1年生より将来展望が低い (佐久田ら, 2003) 1年生よりキャリア意識が高い (新居田, 2019)	1年生より将来展望が高い (佐井, 1994) 男子において2・4年生より職業意識が低い (佐田, 2008) 1年生より将来の目標喪失が高い (橋山, 2006)	2・3年生よりキャリア選択 自己決定感が高い (三宅, 2018) 3年生より職業的不安が低い (佐藤, 1996)	?		
	N 良好な家族関係が学業や友人関係に寄与 (平都富, 2018)							就職不安 (山下, 2011)
対人関係	P 初年ゼミによる初期適応支援 (石川ら, 2017) 新入生オリエンテーション (佐久田ら, 2003) 精神的健康スクリーニング調査 (山口ら, 2019)	学生相談機関の周知度が高い (伊藤, 2006) 学生相談の肯定的イメー (坂本・千鳥, 2018) キャリア形成学習によってキャリア意識が向上 (新居田, 2019)	1年生より親からの心理的自立が高い (佐井, 1994) 1年生より異性関係の意識が高い (杉村・北村, 1980) 対人恐怖心性が入学期より低い (橋井, 2012)	2・3年生より対人恐怖心性が低い (橋井, 2012) 1・3年生より対人的なストレスが低い (橋本ら, 2016)				
	N 2・4年生より対人恐怖心性が高い (橋井, 2012) 3・4年生より評価観念が高い (橋井, 1999)							
予防活動								
自己								

P・・・心理社会的に通じる内容
N・・・心理社会的に通じない内容
?・・・本研究で文献が検出されなかった部分

Figure2 学生生活サイクルの視点から捉えた各学年の特徴

ており、大学教育の中でも学生支援に力が入れている時期と確認された (Figure2)。

その一方で、本研究で整理した入学期の特徴と学生生活サイクルで提示された特徴において、不本意入学の意味づけが必ずしも共通したものとは言えなかった。不本意入学は従来から大学の初期適応を阻害する要因の1つとして捉えられてきた (櫻井, 2009)。しかし、本研究で検索された文献からは、入学期の授業意欲低下や大学意欲低下に対して大学受験時の志望順位は有意な影響を示さないことが確認された (溝上, 2004)。また、第一志望入学者と他大学志望入学者を比較したところ、入学時 (4月) の大学満足感に有意差が示されたものの、5月時点で不本意入学者の満足感が上昇し、第一志望入学者と大学満足感に有意差は示されなかった (庄司, 2011)。不本意入学によって所属大学の学生であることを受容できず、模索の末に別の進路を求める学生 (國吉, 2002; 櫻井, 2009) がいるように、入学期の学生支援において不本意入学に着目する意義は否定されない。しかし、実証的研究の文脈では、不本意入学者は入学直後の大学適応が低いものの、長期的に大学適応が阻害されるとは限らないことが確認された。これは、入学直後に不本意感を持っていた学生であっても、大学生としての生活を開始し、新しい対人関係の形成や将来の目標を見出すことで、所属大学の中に自分の居場所を見出せるためであろう (櫻井, 2009)。したがって、不登校や学習意欲低下といった問題に対する予防的介入を行う際には、不本意入学者であっても主体的に取り組める活動や、広く学生が新しい体験に挑戦しようとする意欲に対して「種まき」(吉武, 2016) をすることが重要と考えられる。そして、そのような取り組みを行ってもなお所属大学の学生であることを受け入れられない学生に対しては、不満を十分に吐き出し、自己と向き合う専門的支援の枠組み (國吉, 2002) を提供することで、主体的な進路の再選択を支えることができるだろう。

中間期の特徴と自己形成支援 2年生は専門的な授業が増えることで学業への意欲が高まることもあるが (佐久田ら, 2003; 坂田ら, 2013), 2年生から3年生にかけて長期的に授業への意欲が低下しやすい時期である (溝上, 2004; 高山, 2006)。進路面では入学期に比べて将来のことに意識を向けやすいが (佐久田ら, 2003; 新居田, 2019; 辻井, 1994), 3年生では進路選択という大きな課題に直面するため、進路に関する不安や回避が生じやすい (高山, 2006; 三保, 2018)。対人関係では対人恐怖心性が入学期に比べて低下し (堀井, 2012), 親からの心理的自立 (辻井, 1994) や異性関係への関心が高まる (杉村・北村, 1989) 時期でもある。

以上で整理した中間期における知見と、学生生活サイクルで示された特徴は整合したものであった。すなわち、中間期は学業、進路、対人関係の各側面で停滞が見られやすい時期であることが確認され、それは学生生活を展開する力を蓄える時期 (鶴田, 2010) という意味合いを持つと考えられた。また、本研究においてキャリア教育の授業実践 (新居田, 2019; 樽木, 2019) が確認されたように、キャリア発達という視点で中間期の自己探索を支援する取り組みは全国的に行われている (例: 寺本, 2019)。さらに、本研究では検索されなかったが、対人関係の苦手意識を強く持つ不登校・ひきこもり学生を対象としたグループ支援 (和田, 2011) や、アクティブラーニングの導入による授業満足度の向上 (杉山・辻, 2014) といった、対人関係や学業を支援する実践研究も蓄積されてきている。特に、中間期の特徴として学業意欲の低下 (溝上, 2004; 鶴田, 2001) があり、休退学の兆しとして授

業への連続した欠席(中島, 2013)が指摘されることから, 中間期の学業に関する予防活動は休退学の一次予防として位置づけることができるだろう。例えば, 入学期では初年次教育やリメディアル教育(川合, 2017)といった枠組みで学業面での予防活動が広く行われているため, こうした取り組みを中間期以降にも広げることが今後期待される。また, 学生相談のような専門的支援部門では, 学生を抱える器(國吉, 2002)としての機能を発揮し, 自己探索を回避しようとする学生に伴走することで, 学生の主体的な意思決定を支えることが期待される。

卒業期の特徴と自己形成支援 卒業期は進路決定の前後によって心理社会的な特徴が異なることが確認された。進路決定前の時期には登校回避行動が高いが(堀井, 2019), 進路決定後の時期には対人関係(坂田ら, 2013; 橋本ら, 2016)や学生生活全般(坂柳, 1997)において満足感や充実感が得られやすい。また, 学生生活サイクルでは「もう1つの卒業論文」を書くイメージ(鶴田, 2001)が卒業期の特徴として指摘されている。本研究で整理した知見と学生生活サイクルの指摘を踏まえると, 卒業期に進路選択という大きな課題に直面している間は学生生活を振り返る余力がないが, 進路決定後はこれまでの人生を振り返り, 内省を深めることで, 対人関係やこれまでの学生生活に満足感や充実感を持ちやすいと考えられる。

ただし, 本研究で検索された卒業期を対象とした文献は少なく, 特に卒業期の学業に該当する「研究」について検討した文献は確認されなかった。大学を卒業するためには卒業論文の執筆や研究発表が課されることが多く, 研究活動は卒業期の主要な課題の1つである(鶴田, 2010)。ストレスを感じながらも研究活動に取り組むことで, 自己の内的課題を研究課題に重ねて整理したり, 取り組んだ研究内容が評価されることで自己肯定感を高めたりする(鶴田, 2001)。また, 卒業論文を作成する過程には楽しさと苦しさが併存し(橋本, 2011), 卒業研究に対するポジティブな認知が高いほど抑うつが低く(橋本, 2004, 2011), 卒業研究に対する自己効力感が一般的な自己効力感を予測する(山本・岩元・原口, 2012)。これらの知見から, 葛藤を伴いながらも卒業論文の執筆に取り組むことで, 精神的健康を良好な状態に保ち, 自己効力感を高められる可能性が示唆される。さらに, 上田(2014)は学生相談の事例を元に, 自己決定理論(Ryan & Deci, 2002)の視点から卒業論文に取り組む学生を支える3階層モデルを提示し, 学生の自己決定性に応じたカウンセラーの関わりが卒業期の自己形成支援につながることを指摘した。しかし, 強いストレッサーとなりやすい研究活動を支える要因や, 卒業論文を完成させることによって得られる心理社会的な成長については今後の課題である。

また, 本研究では学生生活サイクル(鶴田, 2001)で指摘された進路選択に伴う家族間葛藤や進路決定の直前の時期に生じる自己探索(鶴田, 2010)を支持する文献も検索されなかった。進路選択はキャリア発達や生涯発達という, 長期に渡る自己形成の一部であり(Levinson, 1978; Super, 1957), 大学生以降の発達段階に影響を与えるものである。さらに, これからの社会は, 個人, 組織, 国といった様々なレベルで多様化が進むと見込まれており, 大学生は創造性やコミュニケーション能力といった汎用的なスキルだけでなく, 分野を超えて知識や技能を組み合わせる高度な実践力を身に付けることが期待されている(中央教育審議会, 2018)。進路選択はこうした社会的背景の影響を少な

からず受けるため、より一層複雑化する卒業期の進路模索や進路選択を、大学内の連携・協働体制の元で組織的に支援する意義は大きいと言えよう。

本研究で整理された学生生活サイクルの概略的なプロセス 以上で概観した各学年の心理社会的な特徴を概略図として Figure3 に示した。

入学直後は授業意欲の高い者が多いが、1年生の後期から2年生以降にかけて授業に対する意欲が低下しやすい(溝上, 2004)。一時的に専門教育が本格化する2年生にかけて学業の意欲が高まることもあるが(佐久田ら, 2003)、主なプロセスとしては学業の意欲低下が3年生まで長期的に維持される(溝上, 2004; 高山, 2006)。ただし、その後の卒業期において、学業面の主要な課題である研究への意欲が増加するか低減するかは、該当する先行研究が未だ充分ではなく、本研究においては明らかではない。

大学適応も学業面と同様に入学直後は良好な状態を示す者が多いが(庄司, 2011)、1年生の後期から中間期にかけて不適応状態に陥りやすい時期が続く(速水・中込, 1983; 坂田ら, 2013; 橋本ら, 2016; 堀井, 2019)。その後、4年生の進路決定を終えてからは再び大学適応が良好となり(坂柳, 1997; 奥田ら, 2010; 橋本ら, 2016)、学生生活を俯瞰的に捉えれば、緩やかな U 字型のプロセスを辿ることが示唆された。

進路面は揺れ動きが大きいことが明らかとなった。1年生は将来の展望が持ちにくい(佐久田ら, 2003; 吉良ら, 2007; 奥田ら, 2010; 新居田, 2019)、2年生になると進路の意識が高まり、将来への模索が深まりやすい(佐久田ら, 2003, 新居田, 2019)。その後、3年生では進路選択という現実的な課題に直面するため、将来への不安が高まり、回避的な反応として進路に関する意識が一時的に低下することもある(菰田, 2008; 三保, 2018)。ただし、卒業期に進路決定をした後の時期には進路選択の自己効力感を高く持ちやすいことが確認された(三保, 2018; 坂柳, 1996)。

対人関係は概ね直線的なプロセスを辿ることが明らかとなった(堀井, 2012)。1年生は新しい関係性の形成が課題となるため、対人関係の不安が高まりやすい(藤井, 1998)。2年生から3年生にかけては、大学入学後に新しく形成した対人関係の中で自己の立ち位置を模索し、対人的な不安が入学期に比べて低減する傾向がある(堀井, 2012)。ただし3年生では、一時的に周囲のプレッシャーを強く受けることで完全主義傾向や抑うつが高まることもある(羽吹, 2006)。卒業期には安定した関係性の中で友人関係に満足感を抱ける者が多い(坂田ら, 2013; 橋本ら, 2016)。

なお、学生生活における各側面の主なプロセスは直線的に進むのではなく、前進と後退を繰り返しながらサイクル(鶴田, 2001)として進む点に留意する必要がある。Figure3には主なプロセス(黒矢印)から離れる一時的なプロセス(白矢印)も含まれた。これは、学生生活が固定的なプロセスを辿るのではなく、個人や時期、または所属する集団によって変動する幅があることを表している。また、アイデンティティ感覚(辻井, 1994; 内野・青木, 2005; 松島・尾崎, 2013; 宇都宮, 2018)やアパシー傾向(森津, 2008)、就職不安(山下, 2011)等に有意な学年差が示されなかったことから、Figure3は明確で固定的なものではなく、変動幅を持つプロセスであると考えられる。

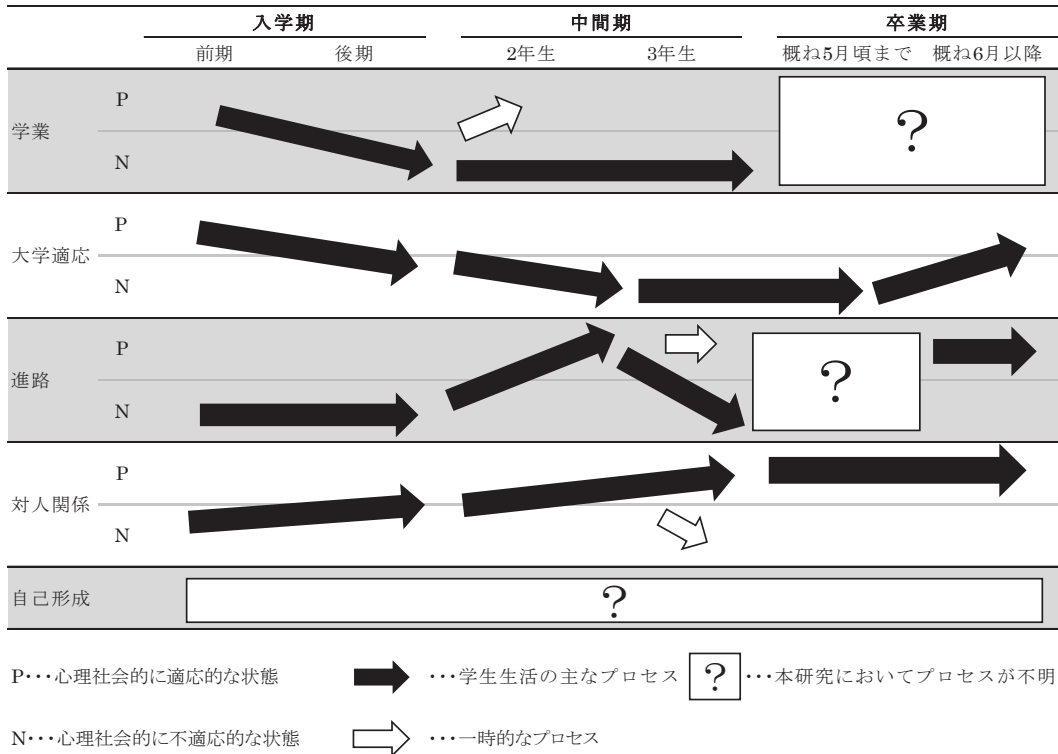


Figure3 学生生活の概略的なプロセスモデル

学生生活の各時期における予防活動の提案 ここまで概観してきた各学年の心理社会的な特徴を踏まえると、それぞれの時期に応じた予防活動は次のように整理することができるだろう。まず、入学期は進路面や対人関係面で不適応状態に陥りやすいため、その後の学生生活に中長期的な見通しが持てるようになることや、新たな友人関係の構築を目的とした予防的介入が効果的であろう。佐久田ら(2003)が報告した入学時オリエンテーションはこうした問題意識の元で行われており、今後も様々な大学で実践されることが期待される。

入学期の後半から中間期にかけては、学業面での意欲低下に着目することが有意義であろう。アクティブラーニングの導入(杉山・辻, 2014)だけでなく、学生が専攻する学問分野の専門的な話題に触れる機会を提供することで、学業面での全体的な意欲低下を予防することができるかもしれない。

中間期後半の主に3年生が該当する時期は、進路選択という大きな課題に直面し、回避的な反応が生じやすい時期であった。本研究では一次的予防活動としてキャリア教育の授業実践(樽木, 2019)が確認されたため、こうした取り組みを進路選択に直面する前段階で提供することにより、キャリアレディネスを形成することが予防的介入として効果的であろう。

卒業期に関しては本研究で検索された文献数が少なかったため、予防活動の提案には限界が残る。ただし、進路決定と卒業論文は卒業期における主要な課題であるため(鶴田, 2010)、卒業期におい

て進路や研究に着目した予防活動は広く求められていると推測される。また、それまでの人生で形成してきた自己の振り返りが卒業期において行われやすいことから(鶴田, 2001), 学生を取り巻く支援者は、青年期まで積み残しやすい心理発達の課題について理解を深め、柔軟な共感的理解の参照枠を持って関与することが重要であろう。

本研究の課題と今後の展望 本研究では大学生の各学年の特徴を先行する実証的研究の結果を元に整理した。その結果、本研究で整理された知見は学生生活サイクルと概ね整合することが確認された。

ただし、本研究で検索された文献から十分に明らかにできなかった点が4点指摘される。1点目は、卒業期の研究活動に関する文献が検索されなかった点である。研究活動を遂行するためには、研究室という新たな環境への適応が求められるだけでなく、中間期までの「与えられた知識」の段階から卒業期の「知識の生産者」の段階へと、学問に向き合う態度を変容させることが求められる(鶴田, 2001)。しかし、講義を通して学んだ専門的知識や技術と、最先端の研究との間には大きなギャップがあることも多く、何から手を付けたら良いか分からない者もいるだろう。また、興味のある研究分野について調べれば調べるほど、興味が拡散してしまい、収拾がつかなくなる者もいるだろう。さらに、そもそも興味のある研究分野を見つけることができず、途方に暮れる者もいるだろう。こうした研究活動の困難さを抱える学生を支援するためには、卒業期における学問に向き合う態度の変容について検討することが求められる。

本研究の限界の2点目は、中間期から卒業期における進路決定のプロセスについて明らかにできなかった点である。3年生の将来展望が高い(辻井, 1994)という文献も確認されたが、多くの文献で進路選択に直面する時期に不適応に陥りやすいことが確認された(羽吹, 2006; 菰田, 2008; 三保, 2018)。進路決定は卒業期における主要な心理社会的課題の1つであるため(鶴田, 2010), 学生相談とキャリア支援の連携による包括的支援体制の構築について、今後の検討が求められる。ただし、卒業期の学生は就職活動や進路決定の最中にあるため、調査研究の協力を得ることが困難と予想される。また、進路決定の振り返りは卒業後になされる場合もあるが、卒業後の学生を追跡する手法にも限界があるかもしれない。卒業期やその前後の時期を対象とした研究を行う際には、調査方法を含めた検討が必要となるだろう。

本研究の限界の3点目は、中間期以降の予防活動に関する実践研究がほぼ確認されなかった点である。本研究の文献検索方法では、入学期の初期適応を支える予防活動は複数確認されたが、中間期以降の予防的活動はキャリア教育の授業実践を行った新居田(2019)や樽木(2019)のみであった。本研究の限界の2点目とも重なるが、中間期から卒業期にかけて進路選択が主要な心理社会的な課題となるため、特にキャリア発達や生涯発達という長期的な視点から、大学生の自己形成支援に資する実践研究を蓄積し、知見を系統的に整理することが求められる。

本研究の限界の4点目は、入学期から卒業期における自己形成のプロセスが整理できなかった点である。アイデンティティ感覚を「自己斉一性・連続性」「対自的同一性」「対他的同一性」「心理社会的同一性」の4側面から捉えた谷(2001)では、18歳から22歳にかけて、年齢が上がるほどアイデ

ンティティ感覚の得点が高いことが示されている。しかし、本研究で検索された辻井(1994)では、谷(2001)と同じ1990年代に調査を行ったにもかかわらず、アイデンティティ感覚に有意な学年差が示されなかった。つまり、アイデンティティ感覚の学年差については一貫した結果が得られていなかったと言える。本研究では2000年代以降に調査を行った文献も検索されたが、それらの研究ではアイデンティティ感覚に有意な学年差が示されていない(内野・青木, 2005; 松島・尾崎, 2013; 宇都宮, 2018)。これらの結果は、アイデンティティ感覚に有意な学年差が示されないという辻井(1994)の結果を支持するものであった。ただし、1990年代以降の日本社会は、社会経済状況が大きく変化し、大学生のモラトリアムの過ごし方も多様化してきたと指摘されている(高坂, 2016)。アイデンティティは社会と個人との相互作用によって形成されることから(Erikson, 1968)、アイデンティティ感覚について検討する際には、時代の変化に伴う環境要因の違いを考慮する必要があるだろう。実際に、アイデンティティ感覚と密接な関係にある自尊感情は1990年以降、減少傾向にあることが報告されており(小塩・岡田・茂垣・並河・脇田, 2014)、自己の基盤となるアイデンティティ感覚も時代の変化の影響を受ける可能性が指摘される。さらに、自己形成とアイデンティティ形成は同質な概念ではないため(溝上, 2008)、現代大学生の自己形成について検討する際には、アイデンティティ感覚以外の指標についても検討を深めることが必要であろう。その際、必ずしも意識的な自己評価に反映されるとは限らない個人の変化にも留意し、量的な検討と質的な検討を組み合わせることで、現代大学生が持つ自己形成のプロセスを多面的に検討することが求められる。

また、今後の研究を行うに際して、学生の所属する学部の違いが影響しやすい部分と影響しにくい部分を区別する必要があるだろう。例えば、入学期の新たな環境への適応や、中間期において自己を模索することは、所属する学部に関わらず共通して見られる心理社会的な特徴であろう。さらに、学問に向き合う態度についても、中間期までの講義中心の受動的な段階から、卒業期の研究活動に取り組む能動的な段階へと移行する姿も、幅広い学部で共通に見られるだろう。しかし、本研究で整理した各学年の特徴は、主に大学卒業後に就職する割合が高い文系の学生を対象とした知見から構成したため、大学院進学率の高い理工系の学生にどの程度の当てはめができるのか定かではない。それに加えて、学生生活サイクル(鶴田, 2001)が提案された時期は大学院重点化が行われ始めた頃であり、全国的に大学院が整備された現在とは卒業期の意味合いが異なる可能性が指摘される。学校基本調査(文部科学省, 2019)によると、2005年以降は概ね25万人以上が大学院に在籍し、大学院進学率は10%程度で推移している。特に理学や工学分野の大学院進学率は約40%と高く、これらの大学院では修士課程(博士課程前期)修了後に就職する者が多い(文部科学省, 2019)。つまり、理工系の学生の場合には、成人期への移行期に当たる卒業期は、大学4年生ではなく修士2年生である場合も少なくない。卒業期の心理社会的な特徴について検討する際には、このような学生が所属する学部の社会的背景にも着目することが求められる。特に、本研究で概観した知見の多くはいわゆる文系の学生を対象とした調査から得られたものだったため、今後は理工系の学生にも調査を広げ、多様な大学生の理解を深めることが大学における自己形成支援の上で重要と言えよう。

【引用文献】

- 中央教育審議会 (2018). 今後の高等教育の将来像の提示に向けた中間まとめ Retrieved from https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1406578.htm (2020年8月9日).
- Crocetti, E., Rubini, M., & Meeus, W. (2008). Capturing the dynamics of identity formation in various ethnic groups: Development and validation of a three-dimensional model. *Journal of Adolescence*, **31**, 207-222. doi: 10.1016/j.adolescence.2007.09.002.
- Erikson, E. H. (1968). *Identity: Youth and crisis*. New York: W. W. Norton.
- 藤井義久 (1998). 大学生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, **68**, 441-448. doi: 10.4992/jipsy.68.441.
- 羽吹香峰子 (2006). 大学生の完全主義的な考え方とうつ傾向の関連について—ストレス対処法の面接調査を通して 創価大学大学院紀要, **28**, 263-284.
- 橋本京子 (2004). 卒業論文作成時におけるポジティブ幻想の現れ方と精神的健康との関係について 京都大学大学院教育学研究科紀要, **50**, 265-276.
- 橋本京子 (2011). 大学生の卒業論文作成時の自己認知, および卒業論文作成状況に対する認知に関する実証的検討—卒業論文作成によって生じるストレスの側面から 京都大学大学院教育学研究科紀要, **57**, 489-502.
- 橋本公雄・藤塚千秋・石橋剛士・栗原武志・宮林達也・北井和利・井上弘人・荒井久仁子・須崎康臣 (2016). 学生生活 QOL 向上に向けた因果モデルの構築—メンタルヘルス, 学業, 生活習慣, 心理社会的変数を用いて 社会福祉研究所報, **44**, 75-96.
- 畑野 快・杉村和美 (2014). 日本人大学生における日本版アイデンティティ・コミットメント・マネジメント尺度 (Japanese version of the Utrecht-Management of Identity Commitment Scale; U-MICSJ) の因子構造, 信頼性, 併存的妥当性の検討 青年心理学研究, **25**, 125-136. doi: 10.20688/jsyap.25.2_125.
- 速水 修・中込四郎 (1983). 学生生活の満足状態と精神的健康状態について 北海道教育大学紀要 第1部 C 教育学編, **33**, 97-104.
- 堀井俊章 (2012). 大学生における古典的対人恐怖心性の発達の变化 横浜国立大学教育人間科学部紀要 I 教育科学, **14**, 63-70.
- 堀井俊章 (2019). 大学院生の不登校傾向を測定する試み 横浜国立大学教育学部紀要 I 教育科学, **2**, 127-135. doi: 10.18880/00012281.
- 細田幸子・三浦正江 (2011). 大学生版デイリーアップリフツ尺度 (DUS) の構成 カウンセリング研究, **44**, 235-243. doi: 10.11544/cou.44.3_235.
- 石川勝彦・児島巧和・青山貴子 (2017). 初年次ゼミの学習到達度を左右する要因の探索—決定木分析を用いた試み 山梨学院生涯学習センター紀要, **21**, 15-30.
- 伊藤直樹 (2006). 学生相談機関のイメージ及び周知度と来談意思の関係 心理学研究, **76**, 540-546. doi: 10.4992/jipsy.76.540.
- 川合宏之 (2017). 多様化する社会において大学の果たす役割を考える—個性を重視した高等教育の実現に向けて 人間生活文化研究, **27**, 20-25. doi: 10.9748/hcs.2017.20.
- 吉良安之・田中健夫・福留留美 (2007). 大学一年次学生の修学意識に関する調査報告 大学教育, **13**, 65-74.
- 菰田孝行 (2007). 大学生における職業価値観と職業選択行動との関連 青年心理学研究, **18**, 1-17. doi: 10.20688/jsyap.18.0_1.

- 高坂康雅(2016). 大学生生活の重点からみた現代青年のモラトリアムの様相—「リスク回避型モラトリアム」の概念提起 発達心理学研究, **27**, 221-231. doi: 10.11201/jjdp.27.221.
- 國吉知子(2002). 不本意入学の不満を訴える男子学生の枠破りと編入の心理的意味について—学生を抱える器としての学生相談室 学生相談研究, **23**, 33-42.
- Levinson, D. J. (1978). *The seasons of a man's life*. New York: Knopf.
- 牧田浩一(2017). 大学生における「色彩コラージュ法」の特徴 北星学園大学社会福祉学部北星論集, **54**, 103-113.
- Marcia, J. E. (1966). Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**, 551-558. doi: 10.1037/h0023281.
- 松島るみ・尾崎仁美(2013). 大学生のアイデンティティとその関連要因 京都ノートルダム女子大学研究紀要, **43**, 1-13.
- 三重野愛子・島田友子・片穂野邦子・河口朝子・稗圃砂千子・氏田美知子・山崎不二子・松本幸子(2016). 看護大学生の夏季休業前後における精神的健康度の変化—University Personality Inventory 尺度を用いて 長崎県立大学看護栄養学部紀要, **15**, 11-20.
- 三保紀裕(2018). 大学生におけるアルバイト観とキャリア選択での自己効力感, キャリア意識の関連 応用心理学研究, **44**, 51-63. doi: 10.24651/oushinken.44.1_51.
- 宮本邦雄・柴崎 建・大平晃久・富田理恵(2011). 大学生のレポートライティングに関する調査研究 II 東海学院大学紀要, **5**, 143-150.
- 溝上慎一(2004). 大学新入生の学業生活への参入過程—学業意欲と授業意欲 京都大学高等教育研究, **10**, 67-87.
- 溝上慎一(2008). 自己形成の心理学—他者の森を駆け抜けて自己になる 世界思想社.
- 水野雅之・千島雄太(2018). 大学生生活への期待と現実のギャップ経験が大学適応に及ぼす影響 カウンセリング研究, **51**, 94-105. doi: 10.11544/cou.51.2_94.
- 文部科学省(2019). 学校基本調査—令和元年度結果の概要—Retrieved from https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1419591_00001.htm (2020年8月9日).
- 森津 誠(2008). 現代学生のアパシー傾向と教室内パーソナルスペース—学生の「やる気」支援の手がかりとして 国際研究論叢, **21**, 9-21.
- 中島絵美(2013). 学生相談の取り組みの検討—本学における大学不適応とは 子ども教育宝仙大学紀要, **4**, 87-96.
- 新居田久美子(2019). eポートフォリオを活用した大学生のキャリア形成学習プログラムの開発研究 人間文化, **45**, 17-35.
- 奥田 亮・川上正浩・坂田浩之・佐久田祐子(2010). 大学1回生から4回生までの横断および縦断データから見た大学生活充実度の推移 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, **9**, 1-14.
- 小塩真司・岡田 涼・茂垣まどか・並河 努・脇田隆文(2014). 自尊感情平均値に及ぼす年齢と調査年の影響—Rosenbergの自尊感情尺度日本語版のメタ分析 教育心理学研究, **62**, 273-282. doi: 10.5926/jjep.62.273.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2002). Overview of Self-Determination Theory: An organismic dialectical perspective. In E. L. Deci & R. M. Ryan (Eds.), *Handbook of Self-Determination research*, (pp.3-33). New York: University of Rochester Press.
- 齋藤憲司(2006). 学生相談の新しいモデル—変動期における指針 臨床心理学, **6**, 162-167.
- 坂本憲治・千島雄太(2018). カウンセリング・イメージの経年変化—教職課程の大学生を対象として カウンセリング研究, **51**, 27-38. doi: 10.11544/cou.51.1_27.

- 坂田浩之・佐久田祐子・奥田 亮・川上正浩 (2013). 複数コホートの大学1回生～4回生の縦断データから見た大学生生活充実度の学年変化 大阪樟蔭女子大学研究紀要, **3**, 29-37.
- 坂柳恒夫 (1996). 大学生の職業的不安に関する研究 大学論集, **25**, 207-227.
- 坂柳恒夫 (1997). 職業的不安と大学生生活充実度との関係 愛知教育大学教科教育センター研究報告, **21**, 79-85.
- 櫻井信也 (2009). 再受験を考える学生とのカウンセリング 早稲田大学大学院教育学研究科紀要, **20**, 71-84.
- 佐久田祐子・奥田 亮・川上正浩・坂田浩之 (2003). 個人特性が心理学科オリエンテーションに対する態度に及ぼす影響(1)—オリエンテーションに対する態度の基礎データ 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, **2**, 59-71.
- 庄司正実 (2011). 心理学系大学新入生における大学生活への適応感と満足感に関連する要因 目白大学心理学研究, **7**, 15-27.
- 杉村 健・北村 隆 (1989). 自我同一性の危機と傾倒に関する領域別の分析 奈良教育大学紀要 人文・社会科学, **38**, 135-151.
- 杉山 成・辻 義人 (2014). アクティブラーニングの学習効果に関する検証—グループワーク中心クラスと講義中心クラスの比較による 小樽商科大学人文研究, **127**, 61-74.
- Super, D. E. (1957). *The psychology of careers: An introduction to vocational development*. New York: Harper & Row.
- 高石恭子 (2013). 教育としての学生相談における事例研究とは 甲南大学学生相談室紀要, **20**, 30-43. doi: 10.14990/00003417.
- 高山草二 (2006). 無気力と無力感—動機の期待×価値理論からの分析 島根大学教育学部紀要 (人文社会科学), **39**, 45-53. doi: 10.24568/5981.
- 谷 冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造—多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成 教育心理学研究, **49**, 265-273. doi: 10.5926/jjep1953.49.3_265.
- 樽木靖夫 (2019). 大学生のキャリア教育における自己探索と現実吟味を高める試み 千葉大学教育学部研究紀要, **67**, 17-23. doi: 10.20776/S13482084-67-P17.
- 寺本妙子 (2019). 大学生のキャリア発達を促す心理教育プログラムの実践と評価—グループワークを活用した試み 開智国際大学紀要, **18**, 5-18. doi: 10.24581/kaichi.18.0_5.
- 徳田完二 (2008). 学生期ライフサイクルから見た職業決定プロセスの諸側面 立命館人間科学研究, **17**, 1-14.
- 鶴田和美 (2001). 学生のための心理相談—大学カウンセラーからのメッセージ 培風館.
- 鶴田和美 (2010). 学生生活サイクルとターニング・ポイント 鶴田和美・桐山雅子・吉田昇代・若山 隆・杉村和美・加藤容子 (編), 事例から学ぶ学生相談, (pp.1-11). 北大路書房.
- 辻井正次 (1994). 女子大学生の発達課題への対処意識と自我同一性感覚との関連について 聖徳学園岐阜大学紀要, **27**, 225-239.
- 上田琢哉 (2014). 卒業論文制作が学生の心理的発達に果たす役割—学生相談事例によるモデル化の試み 愛知教育大学研究報告 教育科学編, **63**, 145-153.
- 内野康人之・青木健史 (2005). 教育学部学生における学習動機と自我同一性との関連 宇都宮大学教育学部教育実践総合センター紀要, **28**, 319-334.
- 宇都宮真輝 (2018). 大学生におけるアイデンティティ発達と学業・友人・家族機能との関連—学生生活サイクルの視点から 吉備国際大学研究紀要 (人文・社会科学系), **28**, 27-43.
- 和田 修 (2011). 大学キャンパスでおこなう、ひきこもり・不登校学生支援プログラム—復学までの過程 社会文化研究所紀要, **68**, 129-146.

- 山口雄介・光井信介・中村季恵(2019). 大学の新入生を対象とした精神健康調査の報告—精神健康の実態と高得点者の特徴を中心に—日本経大論集, **48**, 135-144.
- 山本 登・岩元澄子・原口雅浩(2012). 卒業論文作成に対する自己効力感と重要性認知が一般性自己効力感に与える影響—久留米大学心理学研究, **11**, 91-101.
- 山下 類(2011). 大学生の就職不安と生きがい感について—花園大学心理カウンセリングセンター研究紀要, **5**, 74-87.
- 吉武清實(2016). 学生相談臨床実践のための仮設系—学生相談研究, **36**, 263-275.

Psychosocial Features of University Students from Admission to Graduation: Comparison of the “Student Life Cycle”

Masashi IWABUCHI

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

Michiyo KATO

(Professor, Graduate School of Education, Tohoku University)

This study aimed to review empirical research on the grade differences among university/college students and organize the psychosocial features of each year level. This study evaluated existing research on study motivation, university adaptation, career path, and interpersonal relations among university students; it was confirmed that first-year students had anxiety about the future and difficulty forming new interpersonal relations. Meanwhile, second and third-year students experienced a decline in study motivation and exhibited an evasive reaction to career selection, stemming from the search for a career path. Finally, fourth-year students experienced fulfillment with career decisions and satisfaction with interpersonal relationships. These findings were generally consistent with the “Student Life Cycle” (Tsuruta, 2001), which elucidated the features of university/college students from admission to graduation. Suggestions were made for self-development support based on the features of each year level, and further examination focusing on factors that support research activities and social implications of graduation by the faculty were identified.

Keywords : university/college students, grade difference, student life cycle